

とを期待しているだけに、私の此の論評（それはただ私の理解を示したにすぎぬ）によって、も一度君自身が読み直して、君の見解を確立して立派な刊本として出してほしい、その際長く蘇州に滞在して社会調査をやられ『中国農村社会の構造』再版まで出された東大社会学教授福武直君の門を叩いて教を乞うてほしい。また彼の師であった林惠海氏の『支江南農村社会制度研究』上巻（昭和二十八年刊）の蘇州孫家郷の実態調査（農地篇）とともに、村松祐次君の『江南租棧の研究』から、うんと吸収して欲しかった。私は君のこれからの一だんの学問的成長を冀求して、筆を擱くこととする。（一九七五年一月吉日 枚方市菊ガ丘にて）

ジョージ・チェンパラーティ著

インドの合理的神学、ウダヤナの

『論理の花束』序説

辻 直四郎

本書の目的は、ニアヤ・ヴァイシュニシカ（N・Vと略す）学派の巨匠であり、インド最大の哲学者の一人と目されるウダヤナ（U）の二主著『Amatavivēka』および『Nyāya-kusumāñjali』(N)の中、後者すなわち「論理の花束」の内容

を綿密かつ正確に紹介するにある。整然たる構成のもとに、平明・懇切に記述されているから、ここには順を追ってその概略をなるべく忠実に要約することとした。

著者はインドの有神論諸学派の神の探求に二種の立場があるとし、(一)主として論理的推理による哲学的或いは合理主義のもと、(二)聖典の權威に依拠する神学的或いは聖典本位主義のものとを区別する。西紀第一千年紀に、神の存在を認められたバラモン教諸学派の中、N・Vは第一種に属する典型的『rational theolog』と称することができる。ヴェーダ聖典の權威は、全知なる主宰神 *Ivara* (I) を創作者 (author) としてもつことに基づくとするUにおいて、理知的論証が主役を演じ、ヴェーダは副次的にしかも稀に援用されるに過ぎなご。Uが神の存在を力説したことは、仏教徒およびミーマンサー学派に対する強力な反論として、インド思想史の流れの中に理解されねばならない（以上 Preface）。

本書は二部からなり、第一部は『The author and the work』(p. 17~73) と題し、第一章「ウダヤナ」はその三節に分かれ、Uの生地および年代 (p. 19~21)、『その著作』(p. 22~25)、『Uの評価』(p. 25~33) に関してゐる。正確な文献的証拠はないが、現在ほぼ定説化している見解に従って、生地をミティラーと認め、最初期の作品の一つ *Lakṣanāvahī* が九八四—八五に作られることを許容すれば、さらに重要な

著作は一一世紀の前半に書かれたものと考えている。Uの著書として知られる七篇は、その内容・相互引用の関係を精査して、次の順序に配列される。Laksanamātrī, Laksanāvahī, Āmatadvāivikā, Nyāyākusumñihā, Nyāyaparīśiṣṭa, Nyāyavārtīkaśarparyaparīśuddhi, Kṛṣṇāvahī これにより主著二篇は、綱要書と註釈書との中間に置かれることが知られる。著者は各作品の内容を略述し、現在未刊の部分も逐次出版される見通しがあると言っている。Uはインドの思想家の中に重きをなし、特にN・V学徒の尊敬を受け、他派の学者の中にもUのスタイルを模倣した者がある。両主著は独立した最初のN・V論書(prakāraṇa)として、認識論への貢献は大きく、Uの最大の功績は神の存在を確証した点にある。なおUは宗派的にはシヴァの信奉者であった。

第二章「ニアヤ・クスマ・アンジャリ」は三節の中に、文献としてのNのジャンルと構造、Uの意図(p. 34~38)、構成とスタイルとの特徴(p. 39~44)、内容の分析(p. 45~73)を収めている。Nは五章(stabaka「花房」)の中に、中核をなす七五詩節(Kārikā's 'memorial verses)を含み、注釈を必要としない序頌・跋頌を除き、各詩節に散文の解説・論議が添えられている。Uにとって神の存在は既定の事実であるから、神への崇敬が重んじられる。人が神を臆想し、さらに深く神に関する真理を確信するため、不信者に対する徹底

批評と紹介 辻

的反論が必要であるから、第一ないし第四章は、チャールズファーカ派(唯物論者)・ミーマーンサー学派・仏教徒・ジャイナ教徒およびサンキヤ学派に向けられ、第五章においては、神の存在を積極的証拠によって確定するに努めている。Nは整然たるプランによって構成され、犀利にして説得力ある論法を駆使している。しかしインドの注釈者および近代の研究者の等しく認める通り、Nの理解にはインド弁証法の特徴ならびに哲学諸派の主張に精通する必要がある、決して容易な書物ではない。従って本書の著者がN(ed. Kashi Skt. Ser. with four comm., Varanasi 1957)の内容を詳細に分析表示したことは、今後の研究の指針として絶大の感謝に値する。

第二部 U's doctrine of Īśvara (p. 75~186) は五章に分けてNの内容を展開する。第一章「神の存在の証拠」はUの神論を窺うに最も重要な部分をなし、証拠第一群(p. 86~109)、証拠第二群(p. 109~134)および結語(p. 134~137)の三節からなる。ここにその内容を簡単に説明することはできないから、ただ概要に触れるに止める。Uは第一群ならびに第二群の証拠としておのおの九個を挙げ、その理由は両者に共通する簡単な語句に託されつつ、その語句の意義は二様に解釈される。例えば第一群の第一証拠は kṛtyat 'because of [his] being an effect' (創造物たる宇宙は結果たる性質を有するから、その因として創造者がなくてはならない)で、

第二群の第証拠も同じく *katyat* とされているが、その意味は 'from intention (tāparyat)' (ヴェーダには勸奨または禁止に関する文句があり、或る行為を称讃しまたは非難している) から、或る者の意図が窺われると解され、共に神の存在を予定させる。前述のごとく U が神の存在の実証に全力を注いだのは、仏教の学匠、ことにディグナーガ(陳那)、ダルマキールティ(法称)の N・V 学派に対する攻勢の後を承け、これに反撃を加える必要を感じたからである。U によれば、神は宇宙の創造者・維持者・破壊者であり、有類(生物)の教導者であり、特にヴェーダの創作者である。U の証明はインド特有の思想的背景を離れては理解されないが、彼も知識の根拠 (*pramana*) として、聖典 (*śruti* 聖教量)、推論 (*anumāna* 比量)、特殊の場合には直接知覚 (*sākṣād darśanam* 現量) を挙げている。

第二章「神と宇宙との関係」は二節からなり、神と世界一般との関係 (p. 138~148) ならびに有類との関係 (p. 148~151) を論じている。神は人類の教導者・ヴェーダの創作者として、言語の使用、種々の職業を教示する。輪廻は個人の行為により自動的に発動するものであるから、神は各人が善悪の果を享受するように助力するに過ぎない。神は解脱への間接的補助者で、創造物特に有類に対し慈愛をもつ。次に第三章「神の活動の動機」(p. 155~162) では、神の活動は主

として同情心に基づくものと説いている。第四章「神の本体論」は、神の本質 (p. 163~164) と神の諸性質 (p. 164~182) の説明に当てられている。N・V 学派はいわゆる (*dravya 'substance'*) に属する無数・不滅のアートマン(自我)を認めるが、神は特殊の性質 (*viśeṣaḥgūṇa*) によって普通のアートマンと異なる。神の特殊性質として U は、認識力 (*jñāna 'cognition'*) すなわち恒久の全知性、他をして未得のものを得しめんとする欲求 (*icchā*) ならびにこれを達成せんとする努力 (*prayatna*) を挙げ、これら三者の緊密な関係を主張している。また普遍的性質 (*samanyagūṇa*) に関しては、唯一性、絶大性、遍満性 (*vibhūti*)、個別性 (*prthakīya*) を神に帰し、(アートマンを媒介として) 間接ながら結合 (*samyoga*) と分離 (*vibhāga*) の作用を認める。

最後に第五章「結語」(p. 183~186) において著者は、U に対する世上の非難——彼は既存の論説を総合した編集者で創見に乏しい——に論及し、U が先人に負うところの多いことは否めないとしても、他面において論証法の改良、時代に即応した説明、新しい論拠の提示により、N・V 学派の神論に確固たる基礎を築いた功績は大きいと結論している。なお本書は附録として、N の出版・注釈・翻訳の図書目録 (p. 187~193) と詳細な索引 (p. 196~202) を添えている。単に N、U、または N・V の研究者ばかりでなく、インド哲学一般に

関心をもつ人にとり、本書が今後長く貴重な参考書となることは疑いを容れない。

(An Indian Rational Theology, Introduction to Udayana's Nyāyakusumāñjali by George Chempachy. Publications of the De Nobili Research Library. Vol. I. 203 pp., Wien 1972.)

ゲルハルト・オーベルハンメル編著

啓示・人間の精神的現実

辻 直四郎

本書は *Offenbarung, geistige Realität des Menschen* — *der Beitrag Indiens* の名のもと、一九七三年二月ウインで開かれたシンポジウムにおける発表を、その招集者オーベルハンメル教授が編集出版したもので、啓示の問題をキリスト教とヒンドゥー教との対比において考察することを目的としている(詳しくは二一九—二三〇頁参照)。従って本書第一部は“*Theologische Beiträge*”六篇を、第二部はキリスト教関係の“*Theologische Beiträge*”六篇を収めている。啓示は救い(Heil)との関連において宗教的重要性をも

批評と紹介 辻

つ。この問題がキリスト教神学では比較的に単純であるのに対し、業と輪廻とを前提とするヒンドゥー教にあっては、救いの道或いは解脱の道が種々に説かれて復教化し、神の存在を認めない解脱の道すら可能である。両宗教は伝統を異にするとはいえず、人間が救いを必要とし、人間にとり救いが可能であるとする限り、両者の間に共通点を求めることができる。ここにこのシンポジウムの重要な意義が認められる(七一〇頁参照)。

本書に収められた論文はいずれも専門家の筆になり、内容の充実したものであるから、個々の論旨を簡明に紹介することは容易でない。インド学の一端を専攻する筆者としては、インドにおける代表的天啓書ヴェーダに関するものを主として紹介し、他は題目を列挙するに止める。しかし宗教学者にあれ神学者にあれ、啓示の問題に関心をもつ人は、本書を一読して必ずやその労に報いられることを疑わない。

Gerhard Oberhammer: Das Selbstverständnis des Hinduismus als Religion (p. 13~27). 特に啓示を主題としたものではないが、シンポジウム全体の序説として、ヒンドゥー教の伝承を理解するために有益である。しかしそのその内容を平易な邦語を移すことは困難であるから、ここにはなるべく専門的術語を避けつつ、その骨子を摘記する。

まずヒンドゥー教とは何かという問いに答えることのむす